

特別寄稿

フランス・スラヴ学界展望

杉 山 春 子

本稿の目的は、最近 15 年間のフランスのスラヴ学界を展望し、その主な動向を浮き彫りにすることである。このようなささやかな目的に対処するにしても、この国のスラヴ学の本質に関わる事象について多少なりとも言及せざるをえないであろう。ある学派が成立した知的精神的風土を無視しては、その学派の知的探求の成果を確かに吸収し生かすことも、その発展の軌跡をマクロ的な視点から明瞭に見て取ることもままならないからである。

フランスのスラヴ学の伝統やその隆盛を支えてきたものは何であったろうか。18 世紀、すなわち「フランス的ヨーロッパ」の時代にピョートル大帝がパリ郊外ヴェルサイユ宮殿にてルイ 15 世との謁見に成功したことに始まり、20 世紀に至ってはロシアや東欧諸国の知的エリートがフランスにも大挙したことなど文化交流論的な観点からも、ロシア研究あるいはスラヴ研究におけるフランスのある種の特権性を否定することは正しくない。だが、「フランスの」スラヴ学界という固有の伝統を有するアカデミックな世界が後世に残す知的遺産は、その世界を深く知れば知るほど、究極的にはフランス的な知性の営みの所産であるということを認めないわけにはいかなるのである。遙か 15 年も前のことだが、フランスへの旅立ちを目前に控えたある日、故木村彰一先生からソクラテスとデカルトの古典的な著書を手渡されたことがあった。これもまた上述の「自明の理」に通底する、誠に有り難き教育的配慮であったと私には

思えてならない。

スラヴ学の主な専門教育研究機関を概観しておきたい。中軸的な存在として、まず、パリ第 4・ソルボンヌ大学（以下、第 4 大学と略記）スラヴ学科とミシュレ通りのスラヴ研究所を挙げるのが順当であろう。スラヴ研究所発行の『スラヴ学研究 *Revue des études slaves*』誌を購入している日本の大学、教育研究機関は少なくないようである。プーシキン没後 150 年シンポジウムの記念論集がシンポジウムの翌年 1987 年に『スラヴ学研究』誌第 1・2 号合併号として刊行されたことなど、周知のとおりである。また、当研究所からは『ロシア研究 *La revue russe*』誌という文学、思想のほか政治経済、国際関係、地理、歴史などさまざまな領域でのロシア研究を扱う学際的で興味深い刊行物が発行されている。さて、フランスのスラヴ学研究者の大半は第 4 大学の出身であり、スラヴ研究所を中心に組織されるシンポジウムや学会の組織委員として名を連ねるスタッフの多くが当大学の教官である。このことは、中等教育（リセ）および高等教育（大学）教授資格試験におけるロシア語ロシア文学部門の上位合格者の多くが第 4 大学出身であることからもうかがい知ることができる。

以上のほか、パリ市内にはかつて日本学者エリセーエフが教鞭をとった東洋語学学校やパリ第 3・新ソルボンヌ大学という比較的新しい大学がある。後者は、従来の地域別文学研究という伝統的な学問区分とは別に、世界文学を対象とする比較文学研究

ロシア語ロシア文学研究 32 (2000)

の講座を主軸とし、この観点からのロシア文学研究も盛んである。ついでながら、パリ大学が文系、理系合わせて第1から学部別に番号づけされるようになって久しいが、中世以来の「ソルボンヌ」の伝統を尊重する気風は確固としていて「ソルボンヌ」は第4大学や第3大学の正式名称に名残りをとどめている。また、国立学術研究センターや社会科学高等研究院などフランスにおける新しい「知」の興隆に多大の貢献をしてきた研究機関があるが、ここではその存在を指摘するだけにしておこう。

1980年代なかごろ以降のフランスにおけるロシア文学研究の分野で最も注目すべき事柄は何であろうか。スラヴ学界内外でのロシア文学関係の動きをふりかえってみたい。ところで、筆者は1985年にパリに居を定めて7年ほど第4大学スラヴ学科博士課程に留学したが、ちょうどこの時期は1910年代から20年代生まれの反体制派の亡命ロシア人がまさに人生の決算期を迎えた頃であった。「ゴルバチョフとペレストロイカの時代」の時流を背景に彼らの活動が顕著になり、アカデミックな場以外においてもパリ市内の劇場などでさまざまな集会、——たとえば、「ロシア文学は一つか二つか？」というようなお馴染みのテーマが再燃し、西側で活躍中の高名なロシア人のジャーナリストや文学者、思想家が四方山の話をし、フランスの大学人とも意見の交換をして、聴衆とともに知的、精神的な楽しみを求めるような座談会が行われていた。パリはその長い歴史のなかでつねづね異文化交流の場として何らかの役割を果たしてきたが、上述のごとき「サロン」文化の伝統の片鱗をのぞかせる事柄がフランス・スラヴ学界の発展に有意義であることは想像に難くない。

いっぽう、スラヴ学界では1980年代半

ばに20世紀ロシア文学関係の国際シンポジウムが次々と開催された。フランス人研究者やロシアから亡命しパリ大学教授となったシニャフスキイ(第4大学)やエトキント(パリ第10・ナンテール大学——以下、第10大学と略記)のほか、ロシア本国を除く欧米やイスラエルから第一線の研究者がパリに集ったのだった。すべてのシンポジウムや会合を列挙する事はできないが、特に印象深かったのは1986年に開かれた国際シンポジウム「象徴派後のロシア詩」と「ロシアの定期刊行物と文学プロセス」で、いずれも朝から夕方まで3日連続の大規模な学会であった。特に前者はグミリョフ、リフシッツ、クルチョーヌィフ、ホダセーヴィチの生誕100年記念とクズミーンの没後50年記念を同時に行うという盛大なシンポジウムであった。1986年は特に記念行事ラッシュの年となったため、本来ならば同年に開催されるはずのゴーリキー没後50年記念シンポジウムが翌年春に繰り越されるといった事態まで起きた。この国際シンポジウムにおいてもゴーリキー、それにソヴィエト文学の意義を問う、熱心な討議が繰り広げられた。

次に、これらと同時期に開催された、フランス文化関連のシンポジウムの主なものを見ておこう。たとえば、フランスにおけるロシア小説の紹介に多大の貢献をしたウジェーヌ・メルキオル・ド・ヴォギュエ子爵の著作の集大成『ロシア小説』(1886)の出版100周年の記念行事が1986年に行われた。ここでは『ロシア小説』の再評価およびその問題点の検討がなされ、この機に竿さしてさまざまなロシア小説論が展開された。さらに、1989年はフランス革命200年記念祭にあたり『スラヴ学研究』誌1989年第1・2号合併号では、「スラヴ民族とフランス革命」をテーマとする記念号

特別寄稿

が企画された。また、その翌年には国際シンポジウム「チェーホフとフランス」が開催され、モスクワ大学のカターエフ教授をはじめとするソ連からの参加もあった。紀元2000年を目前に控えた1990年代には、ロシアをはじめとするスラヴ諸国とフランスの18世紀以降3世紀にわたる関係を、文化、歴史、政治経済などさまざまな観点から研究討論する学際的なシンポジウムがたびたび開催されていた。以上のほか、フランスに亡命したトルストイ家ゆかりの人々が後援する「トルストイの友の会」の、スラヴ研究所内で行われる定例学会が健在である。このような家族的な雰囲気のある学会にソ連（ロシア）を含めた外国からのゲストが参加することも珍しいことではない。

さて、プーシキン祭関係の国際シンポジウムについて簡略ながら歴史的考察をしておきたい。1937年に行われたプーシキン没後100年記念式典は、当時のソ連の政情とそれに対処するフランス側の外交政策を色濃く反映したものであった。フランス政府外務大臣、文部大臣、ソルボンヌ大学総長、同文学部長やポール・アザール、ポール・ヴァレリー、ポール・クロデルなど、当時のフランスを代表する知識人による記念式典がソルボンヌ大学構内で行われ、そのいっぽうで、ソ連とは決別した亡命ロシア人たち、ディアギレフ（ジャークレフ）の盟友であったセルゲイ・リファールやアレクサンドル・ベヌアなどが紆余曲折の末、パリ市内のプレイエル劇場でプーシキンの未公開書簡と原稿から成る展覧会「プーシキン展」を開催したのだった。

だが、その50年後に開催されたプーシキン没後150年記念国際シンポジウム「プーシキンとフランス」には、フランス人および亡命ロシア人の研究者や、他のヨーロッパ諸国、アメリカ、それにソ連か

らも研究者が一堂に会し、3日間にわたって研究報告と意見交換が行われた。座談会やフランス国立シャイヨー宮劇場参加のプーシキン作品の朗読会が行われるなど「プーシキン祭」という意味でも充実していた1987年の記念行事は、フランスとロシアの間にいささかの亀裂も生じることなく成し遂げられた。このシンポジウムの成功によって、プーシキン没後100年記念祭をめぐってフランスとロシアが「対立」した過去の一連の経緯が清算され、同時にヨーロッパのスラヴ学界の中軸的な存在というフランス・スラヴ学界の位置づけが再確認されたと言ってよいであろう。それにしても、このシンポジウムに先だってエトキント教授らが最晩年のリファールをローザンヌに訪問したことなど、1987年のプーシキン記念祭にかけた在パリ・インテリゲンツィアの強烈な自負に畏敬の念を禁じ得なかったのは果たして筆者だけであつたろうか。

これまで、フランス・スラヴ学界の動向を文学関係を中心にロシアとフランスの双方の視点から検討してきたが、こうした動向は当然のことながら、学界内でそれなりの準備段階を経てきた結果なのである。どのような状況であつたかという点、まず、1980年代にすでに教授として活躍した世代は、たとえば1950年から第4大学の教授を勤めスラヴ学の権威として日本においても高名なピエール・パスカル教授の門下生、あるいはその次世代であつたことを断っておかねばならない。というのも、フランスでは1960年代に「構造主義」と「アナル学派」という新たな「知」の興隆が起こり、その多大の影響は学問領域の枠を越えてスラヴ学界にも及んだからである。つまり、文学とその周辺的な事象に関する徹底したフィールド・ワークと緻密な

ロシア語ロシア文学研究 32 (2000)

分析, および歴史的考証から, これまで明らかにされていなかった実相を浮き彫りにする傾向によりいっそう拍車がかかったのだった。このような学問的な環境のもと, ロシア文学史の更新もしくはその空白を埋めるための準備が進行していたのだった。

見逃しがたい事をいくつか挙げると, 1975年に開催されたパステルナーク没後15年を記念する世界初のパステルナーク国際シンポジウムとその4年後, 1979年にスラヴ研究所から発行された同シンポジウムの記念論文集 (*Boris Pasternak 1890-1960*), 同じくスラヴ研究所刊のマンデリシュタームのモノグラフィー (*N. Struve, Ossip Mandelstam*, 1982) やツヴェターエヴァのほぼ全作品のビブリオグラフィー (*Bibliographie des oeuvres de Marina Tsvetaeva*, 1982) の出版などがある。もちろん, 過去の『スラヴ学研究』誌を概観すれば明らかのように, 20世紀ロシア文学以外の領域でもすぐれた業績が積み重ねられていた。そのすべてを挙げることは不可能なので, 例としてスラヴ研究所刊の紀要『トルストイ研究ノート Cahiers Leon Tolstoi』と, フランス・アカデミー賞の栄誉を担った学術著書『トルストイの作品における女性たち』 (*M. Sémon, Les femmes dans l'oeuvre de Leon Tolstoi, romans et nouvelles*, 1984) の存在を記しておく。

以上の段階をへて, 1980年代なかごろからはフランス・スラヴ学界において国際シンポジウムが盛んに開かれ, 第一線の研究者の国境を越えた積極的な交流が促進されたのだった。その成果として学界では新たな業績がまとめられたが, こうした流れの頂点に立つスケールの大きな業績が1987年から1990年代にゆっくりと世に送り出された。フランスをはじめ世界各国の第一線の研究者による大部のロシア文学史

シリーズ (*Histoire de la littérature russe*, Fayard) 全7巻のことである。ただし, 同じ大型本といっても, アメリカの大学等で出版されているダイジェスト版ロシア文学解題とは性格が異なり, ルモンド紙のベテラン文芸批評家 N. ザンドが「いかなる国の言語においても存在したことの無い, 野心的, かつ必要不可欠な文学史」と賛辞を述べ, 書評ページ全紙面を当文学史の書評に費やしたほどである。力作ぞろいの様子はまさに百花斉放の趣と言えよう。このロシア文学史の編成は, それぞれ時代別に6世紀から18世紀まで「起源から啓蒙の世紀まで *Des origines aux Lumières*」1巻, 19世紀に「プーシキン時代 *L'époque de Pouchkine*」と「小説の時代 *Le temps du romans*」全2巻, 20世紀に「銀の時代 *L'Age d'argent*」「革命と1920年代 *La Révolution et les années vingt*」「凍結と雪どけ *Gel et dégel*」全3巻, 以上に加えて「ロシア文学全体の諸問題 *Problèmes généraux de la littérature russe*」1巻, 計7巻である。各巻の頁数は平均して約800頁, 巻末には各章の注釈, ビブリオグラフィー, 執筆者目録, 人名・作品名索引が付いている。巻ごとの執筆者数は約25名, 使用言語はフランス語に統一され, オリジナル論文が他言語の場合は, 同文学史シリーズのフランス人の同僚が翻訳の労をとっている。

全体の編集・校閲を引き受けているのは, ロシア文学・詩学研究の各分野で世界的な権威として知られるエトキント教授とセルマン教授 (イスラエル大学) およびニヴァ教授 (ジュネーヴ大学) とストラダ教授 (ヴェニス大学) である。ところで, エトキント教授は1974年にフランスへ亡命, ロシア本国ではフランス文学の教授だったこともあり, 第10大学での授業からはフランス的な気質が感じられた。亡命後はロ

特別寄稿

シア文学の専門家として活躍。『スラヴ学研究』誌 1998 年第 3 号の特集「詩的空間」は同教授の長年の功績を讃えての企画である。セルマン教授は 1976 年にイスラエルへ亡命、在ソ連時代すでに、ソ連科学アカデミーでは 18 世紀ロシア文学研究の「泰斗」と目されていた。ロシア文学史関係の学術書の執筆、校閲経験も豊富だが、強制収容所の体験者でもある。ここでつまびらかにすることは無理だが、亡命後のセルマン教授はフランス・スラヴ学界と深い絆で結ばれていた。国際シンポジウムやフランス人教授連の月例会での碩学セルマン教授の研究報告は常に深い感銘を与えた。ともに 1910 年代生まれの両教授が余人に代えがたき存在であることは、誰しも納得のいくところであった。

かくして、1990 年代終わりにフランス・スラヴ学界では最新のロシア文学史編纂という金字塔がうち建てられた。この文学史においては、各章の論考が有機的に関連し各時代の文学的事象の真理に迫っていることはもちろん、さらに特徴的なこととして、それぞれの時代で文学形成の基底として認識されるさまざまな芸術ジャンルや歴史・社会的事象について、文学とは別扱いの独立した章が設けられている点を挙げなければならない。これによって文学史という大枠のなかで政治、社会、文化の諸相が明瞭に浮き彫りにされた結果、文学史の可能性が最大限におし広げられ、全体として「文学のプリズムを介してたち現れたロシア史」という、従来の文学史には希有な奥行きとパノラマが顕現したのである。ほかのどこでも刊行されえないような文学史がフランスで出版されたことは、フランス

の知的精神的風土に育まれたフランス・スラヴ学界において、歳月をかけて幾多の布石が固められた結果である。しかしそこには、この学界の知的活動に関心を抱いた他国の研究者や、亡命先の知的エリートにとけ込むことに成功し、学問研究の開花の為には献身を惜しまなかったインテリゲンツィアの貴重な貢献があったことも認めなければならない。

止揚すると、こうした現象はフランス文化においては珍しいものではなく、かつて 17 世紀末から 18 世紀に、ヨーロッパの知的エリート集団の、実存する社会とは無関係に形成された活動の場、すなわち「ヨーロッパ文芸共和国」の拠点としてフランスが果たした役割を想起させるものである。21 世紀に向けて、フランス・スラヴ学界から上述の文学史が刊行されたことは「第三のヨーロッパ統合」がアカデミックなレベルにおいても進行しているというひとつの証であり、学芸におけるヨーロッパ精神のエリート的存在というフランスの「伝統的な役どころ」が最善最良の意味で発揮されたと考えられるのである。

20 世紀末に、フランス・スラヴ学界ではロシア文学研究の分野で、人間一代では到底為しえない知的遺産が創造された。このような学問研究の進歩が現実となった時、それはすでに伝統として記憶され、新たな学問的探求のよすがとなっている。また、「ヨーロッパ統合」という言葉が一般的となった今日、国家、民族の枠を越えた共同研究作業の成果がスラヴ学全般で期待されており、フランス・スラヴ学界の役割が将来、おいに問われることであろう。

(すぎやま はるこ・中央大)